よかネット
YOKANET
No. 84　2006. 11
㈱よかネット

もくじ

NETWORK

「サイエンス・カフェ」をやってみよう！
―糸島で始まったサイエンスキャラバンの取り組み― …… 2

佐賀市の観光振興への取り組みの紹介
～佐賀市観光振興戦略プラン～ …… 4

特産品・郷土料理開発で雇用づくり
～平戸・松浦地区観光人材育成プロジェクト報告～ …… 6

ほとんどの人は鹿児島の有名な観光地へ行っている
～鹿児島度自己採点をしました～ …… 7

表紙説明 地域計画のための一知半解事典
地域基幹型産業は全国で減少、
これを先導型や地域づくりサポート型が支えている …… 8

見・聞・食

高取焼400年祭と上野焼陶器祭に行ってきました …… 11

近　況

前原市の中心市街地の人たちと九大生の交流の場づくり …… 13

本・BOOKS

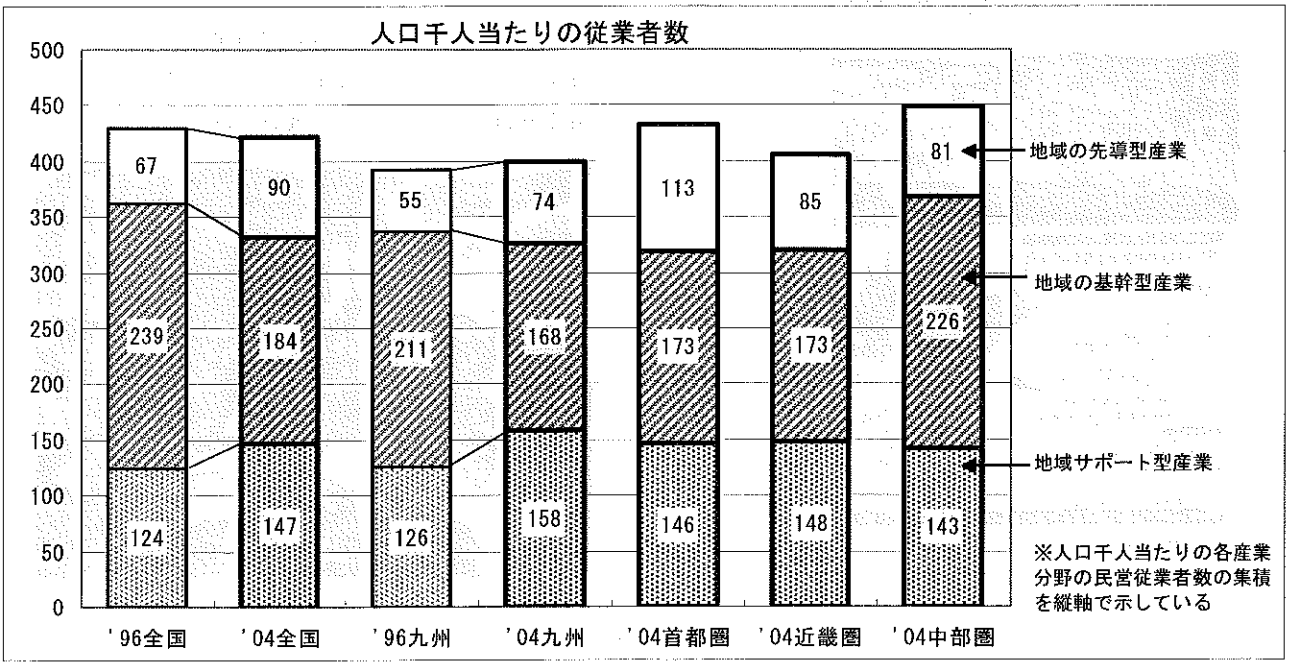
協働社会をつくる条例
市民がつくったまちの憲法
使える！岸和田市自治基本条例 …… 14

お知らせ …… 16

●地域の体力を支える基幹型産業の集積が全国で減少、先導型とサポート型が拡大

官から民へ、民間の力を生かした地域活性化が進められる中、現在の民営産業はどうなっているか。地域づくり先導型、地域づくり基幹型、そして地域づくりサポート型の３区分により、民営従業者数の集積を全国、ブロック、九州で比較した。農林漁業、製造業など基幹型産業は大きく減少するなか、先導型とサポート型がこれを補完するという構造に。（解説記事８頁）

※産業の分類方法
地域の先導型：教育、学術研究機関、情報サービス、娯楽、専門サービス、金融、不動産など
地域の基幹型産業：農林水産、製造、エネルギー、建設、卸売など
地域サポート型産業：医療・福祉、小売、飲食、廃棄物処理など



「サイエンス・カフェ」をやってみよう！

－糸島で始まったサイエンスキャラバンの取り組み－

本田　正明

「サイエンスカフェ」というのをご存じだろうか。私もつい最近まで知らなかったのだが、日本中でサイエンスカフェを開催した日本学術会議のサイト（http://www.scj.go.jp/cafe/web-content/）によると、「街中のカフェなどをお借りして、アットホームな雰囲気の中、科学者と参加者が直接会話を楽しむことを目的に開催されて」いるものがサイエンスカフェらしい。ポータルサイト（http://cafesci-portal.seesaa.net/）まで出来ていて、東京、関西、東北、北海道では盛んに行われているようだ。

●糸島でサイエンスカフェが生まれるきっかけ

九州とは縁の薄い「サイエンスカフェ」を知るきっかけになったのは、今年の５月に開催したロレアルワークショップである。参加者からの申し込み電話で「サイエンスカフェはまだ福岡で開催されていないが、ロレアルワークショップもサイエンスカフェに似ているので、ぜひ福岡でもサイエンスカフェをやってほしい」と言われ、カフェのチラシをわざわざワークショップの会場に持ってきてくれたのだった。

糸島地域に移転を始めた九州大学と地元とのネットワークをなんとかしてつくれないかと日々思っていたので、科学を身近に感じてもらうことから始めるサイエンスカフェのコンセプトは非常にいい取り組みだとその時に思った。

キャラバンのチラシ

ちょうどそのころ、福岡県と前原市・志摩町・二丈町が糸島地域学術研究都市協議会という組織を立ち上げ、九州大学と地域のつながりをつくるために交流の場が必要だという議論をしていた。サイエンスカフェを糸島地域を巡回させるイメージで「サイエンスキャラバン」という企画を提案したところ、すぐに採用され、さっそく実施されることになった。

●あっという間に実行チームが生まれる

サイエンスカフェのそもそものコンセプトは、“科学者と参加者が直接会話を楽しむこと”である。“街中のカフェ”があまりない田園地域の糸島で、単なる講演会ではない雰囲気をどうしたら作れるか、というのは非常に悩ましい問題だった。

企画会議の際「九州大学の若手の先生に参加してもらったら、相互に話しやすい雰囲気になるのではないか」という話になった。ロレアルワークショップの際に紹介されて知り合いになっていた九州大学のバリエタスという若手研究者グループに相談にいったところ、そちらでも「ばりカフェ」というサイエンスカフェを企画しているところで、連携してやりましょうという話になった。さらに九州大学の知財本部や前原市の商工会、糸島まちおこし実行委員会などの各グループからの協力も得ることができ、気がつけば10月に１回目

ほぼ満員となった会場

唐辛子の辛味と霊芝の苦味を味わってもらう

大貫先生のプレゼン風景

さまざまな形と種類の霊芝も展示

清水先生のプレゼン風景

を開催することになっていた。

●地域とのコミュニケーションを深めるためのアイディアがいろいろ生まれる

やる気のある人たちが、一つの目的で集まると本当に面白い。「糸島と九州大学との間に共同研究や新しい産業につながるような場をつくる」というのが大きな目的なので、糸島の中心産業は農漁業だから「自然の恵みを科学する」というテーマでとりあえず１年目は３回ほどをやってみようということになった。その後は、「複数の先生の話があると議論の幅が広がるのでは？」、「先生の発表は短くして、会場との討論時間を長くしよう」、「先生方の話をわかりやすく伝えるモデレーターを入れよう」、「せっかくだからパネルで九大の宣伝をしよう」、「飛び込みのプレゼンも受付けよう」という形で、どんどんアイディアが出てくる。最初の講師を引き受けてもらった大貫先生と清水先生は、食品の成分を発見したり、分析したりするプロなので、「機能性食品のヘルシアを例に使うとわかりやすいのでは？」などと話が膨らんだ。「糸島の人は奥手なので、なかなか手を挙げて質問しないのでは？」という問題に対しても、途中に休憩を入れて、その間に質問を記入してもらって、それをベースに意見交換をしようということになった。

●60人を超える参加者があったサイエンスキャラバン

開催が決まってからの悩みは、どれくらいの人を集めたらいいのだろうかということだった。サイエンスカフェは、そもそも科学者と参加者が直接会話を楽しめることを目指しているので、どちらかというと20～30人規模のものである。しかし、せっかく九大の先生の話を聞ける場であるし、地元産業の事業者と先生がつながるきっかけにしたいという思いもあって、50人を目標にすることで落ち着いた。結果的に１回目は、60人を超える参加者があったのだが、講師の先生方から「会場と一体感があって非常に楽しかった」と言ってもらえたので、サイエンスカフェの意義も失わずにキャラバンを実施できたのはないかと思う。

●第１回のテーマは、健やかになる「辛味」と「苦味」

キャラバンの実施に至るまでの経緯の話が長くなってしまったが、実際の内容も非常に面白かった。話のテーマは、健やかになる「辛味」と「苦味」である。会場には唐辛子と霊芝の粉を配り、

会場からの質問を中心に討論会

みなさんに辛味と苦味を体験してもらうことから始まった。

大貫先生は、マウスなどを使って、植物の成分がどのような効果を持っているかを計測したり、評価することを行っている。その中で、企業との共同研究によって、唐辛子の「辛味」成分がダイエットに効果があるという成果が得られ、製品化もされたそうで、その発見に至る経緯の話や辛くない唐辛子でもダイエット効果が得られるといった話をしてもらった。

一方清水先生は、身体に効く“成分探し”のプロフェッショナルである。もともと植物の研究をしているのだそうだが、たまたま知り合いの人との飲み会で、霊芝（れいし）を焼酎につけて飲む人がいて、身体にいいから研究してほしいといわれたことがきっかけで霊芝の研究を始めたのだそうだ。その結果、骨粗鬆症に効果のある成分を発見したということで、“人の噂を科学する”ことで、研究成果が得られているという話だった。

ちょうど二人は、“健康に効く成分を発見する人”と“その効果を計測・評価する人”なので、後半は、糸島の野菜や植物が身体にいいといった噂がないだろうかという話で盛り上がった。その他にも、「どくだみを煎じて飲むとかゆみ止めになる」という話や「びわの葉が腰痛に効く」といった話などが出てきて、先生たちもどのような成分の効果か、想定しながら答えていただいた。

●インターネットも活用して情報配信を

質問も記入式にしたおかげで、大量の質問をいただいたのだが、逆に回答する時間が限られていたりと、なかなかスムーズに進行できないところもあった。ただ、企画実行チームでは「トライアンドエラーでやっていこう」といっているので、その問題はインターネットを活用して配信することで対応しようという話もしている。まだサイトは立ち上がってはいないが、第２回を11月末、第３回を２月と行っていく予定なので、今年度中に実現したいというのが今のところの目標である。

次回は耕作放棄地をテーマに志摩町で行われるので、興味関心を持たれた方はご一報ください。

（ほんだ　まさあき）

佐賀市の観光振興への取り組みの紹介
～佐賀市観光振興戦略プラン～

原　啓介

昨年から、佐賀市観光振興戦略プラン策定のお手伝いをしている。佐賀市は昨年10月に佐賀市・諸富町・大和町・富士町・三瀬村が合併し、九州最大のマーケットである福岡市と隣接した。観光振興戦略プランは、合併した新市の観光戦略をつくるとともに、少子高齢化や団塊の世代の退職、人々の趣味や嗜好の変化などに対応したコンセプトとすること等を目的に、地元佐賀や福岡の観光関連事業者・マスコミ関係者等20名からなる委員会（委員長：立教大学観光学部村上和夫教授）において作成された。

●磨けば光る佐賀の資源

今回の業務で、佐賀市の様々な観光資源に触れ、多くの観光資源があることを知った。旧三瀬村や旧富士町、旧大和町では、山あいに豊かな自然や温泉などがあり、直売所で新鮮な農産物を買うことができる。街なかには、鍋島家や、明治時代の賢人達にちなんだ歴史遺産や、お茶・お菓子・伝

インテリアに名尾和紙を使う建築家もいるそうです

手織りの鍋島緞通は一枚約百万円と、大変高価なものです

海苔の種の培養から生産までを、一貫してこだわる生産者

緞通ミュージアムの中は、しっとりと落ち着いた雰囲気

海苔をアイスにするというアイデア商品
製品化には、多大な苦労があったそうです

統工芸品などの文化がある。旧諸富町には、筑後川や有明海に関係した資源がある。他にも、バルーンフェスタや佐賀城下ひなまつりといった集客力のあるイベント等があるが、その中で、特に印象に残ったものをいくつか紹介する。

・名尾和紙（谷口和紙工房）

佐賀市大和町にあり、佐賀に一軒だけ残る手漉き和紙工房。提灯用の和紙が得意で、博多祇園山笠の際の櫛田神社の提灯も作っている。障子紙やライトカバーなど、お洒落な和紙を使ったライフスタイルの提案も行っている。

・吉島家緞通ミュージアム

鍋島緞通のミュージアム兼工房。鍋島緞通は三百年の歴史がある敷物で、現在市内では吉島家一軒のみが今も織り継いでいます。雰囲気の良い建物で、２階からは佐賀城のお濠を眺めることができる。

・佐賀海苔と、焼きのりアイス

海苔の収穫量日本一であることに加え、幻の海苔とまで言われている「あさくさ海苔」の栽培も行われている。観光振興戦略プラン策定委員でもある、元漁協職員の古川さんは、佐賀の海苔をもっと多くの人に食べてもらいたい、本物の海苔のおいしさを知ってもらいたいということで、あさくさ海苔を使った商品開発に取り組んでおられる。その結果、“焼きのりアイス”というユニークな商品が生まれ、平成16年度優良ふるさと中央コンクールで農林水産大臣賞を受賞された。海苔をつなぎとして使っているそうで、食べてみると、ほのかに口の中に海苔の香りが広がる。佐賀市内の直販所の「街かど畑」などで購入できる。

・佐賀県陶芸協会常設展示場

佐賀の中心市街地にある呉服町商店街に、空き店舗を改装した佐賀県陶芸協会の常設展示場が、今年10月オープンした。ここでは、文化勲章受章の青木龍山や、14代酒井田柿右衛門と井上萬二の人間国宝をはじめ、14代今泉今右衛門など、佐賀の名陶68名の作品を楽しむことができる。そのうえ、これらの作家が作ったカップでコーヒーが飲める。一つ15万円のものもあるそうで、「コーヒ

ーカップを持つ手が震えます」といった声も聞かれた。

●できることはすぐにやる

委員会では、「佐賀市のイメージがない、何があるのかわからない」、「広くなった新市の観光資源の見直しと発掘が必要」、「また来たくなるような“もてなし”人材の育成が大事だ」といった課題があげられ、具体的なアイデアをもとに、これから今後３年間で、いつ何をやるか、誰がやるかという17の“アクションプラン”を提案し、その実行に向けた活動が始まった。

プランを策定する過程で、「来年度まで待たずに、今取りかかることができるものは、すぐにやるべきだ」といった意見が出され、17のアクションプランの中の３つについては、今年度、プレアクションとして取り組むこととなった。

①佐賀市のイメージを表現するキャッチフレーズの作成

佐賀市観光のイメージアップのために、佐賀市のイメージを一言で表すキャッチフレーズの募集が始められた。

募集内容：豊かな観光資源がある新しく誕生した「佐賀市」の観光イメージを表現したキャッチフレーズ
賞：最優秀賞１名（賞状、ＪＲ九州旅行券３万円＋日韓高速船ビートル往復ペア乗船券）
優秀賞２名（賞状、佐賀－大阪往復航空券）
募集期間：平成18年12月20日必着
発表：平成19年１月予定
詳しくは佐賀市ホームページにて
http://www.city.saga.lg.jp/

②佐賀の物語・蘊蓄（うんちく）を活かした商品開発

佐賀市蓮池の生まれで、煎茶道の祖と言われている“高遊外売茶翁”の歴史を活かし、“佐賀城下ひなまつり”の期間中に、佐賀の特産品であるお茶・和菓子・焼き物（陶器）の３点をセットにした商品を開発し、会場内で新しいサービスを提供する。

③おにぎりカフェのオープン

同じく佐賀城下ひなまつり期間中に、まちなかで佐賀のおいしいお米と海苔を味わうことができる“おにぎりカフェ”をつくり、もてなしのノウハウを習得するための場づくりを行う。

新佐賀市の総合計画の中でも観光の振興は最も大きなテーマの一つであり、プランは既に具体的な実施に向けて動き出している。来年の佐賀城下ひなまつりも一段と磨きのかかったもてなしのイベントとなることを期待したい。

（はら　けいすけ）

特産品･郷土料理開発で雇用づくり
～平戸･松浦地区 観光人材育成プロジェクト報告～

雪丸　久徳

この秋より、長崎県の平戸・松浦地区で「観光人材育成プロジェクト（特産品・食の開発編）」が始まった。このプロジェクトは、市や商工会議所、観光協会等で構成する平戸・松浦地区観光人材育成協議会が、国（厚生労働省）の採択をうけて、本年度から20年度までの３年間にわたって実施するもので、６月頃この事業に対しての企画提案の募集があり、お手伝いすることが決まった。

特産品・食の開発編という名のとおり、このプロジェクトは、平戸・松浦で獲れる農水産品を使った特産品や新たな郷土料理の開発に係わる人材育成が主なテーマになっている。本プロジェクトは最終的には既存企業の事業拡大や新規起業等により地元雇用を創出することをネライとしているものである。

プロジェクトは、「目玉商品新みやげ品コース」、「新郷土料理開発・地産地消推進コース」の２コースからなり、参加者は、農家、漁家、飲

古川さんのじげもん料理づくりをみて、試食しながらアイデアだしをおこなった

食店、ホテルなど様々な職種の方が集まった。各コースとも、参加者が集まりやすいように、日曜の午後や月曜の午後に行っている。日によっては、少ないこともあるが、毎回10～20人程度の参加がある。

「目玉商品新みやげ品コース」では、①商品開発・企画立案、②パッケージ・デザイン、③情報発信・流通・ＰＲの一連のノウハウを学ぶ基礎講座の続き、個別相談や指導を行う予定にしている。一方の「新郷土料理開発・地産地消推進コース」では、①基礎講座、②新郷土料理づくり（企画編）、③新郷土料理づくり（実践編）と続き、その後に個別指導を行っていく予定だ。（詳しくは平戸・松浦地区観光人材育成協議会http://www.city.hirado.nagasaki.jp/jinzai/）

既にいくつかの講義が行われ、「目玉商品新みやげ品コース」では食環境ジャーナリストの金丸弘美さんによる他地域の成功事例の紹介、「新郷土料理開発・地産地消推進コース」では、経営コンサルの原忠男さんによる商品開発の心構えや社会の潮流、また実際の料理づくりでは佐賀市の居酒屋「ふるかわ」の古川則雄さんによるじげもん（地元の食材）の再確認と調理のアイデア出しなど、お話頂いた。

最終的には、どれだけ雇用が増えたかが評価される事業であり、成果が簡単に出てくるものではないが、まずは個人でもグループでも、とにかくやる気のある事業者、人を発掘することが必要である。それから、参加者（推進母体）が「自ら考えて」→「不足していることを学び」→「実践する」ということを繰り返す、そういう良い循環をつくることが今回のポイントだと思う。

今回のプロジェクトでは、基礎講座と個別指導の２段階構成を取っており、実際に個別指導をお願いする講師については、その内容に応じた組み立ても必要である。

この取り組みについては今後も報告していきたい。　　（ゆきまる　ひさのり）

ほとんどの人は鹿児島の有名な観光地へ行っている
～鹿児島度自己採点をしました～

山田　龍雄

この形式のアンケート調査は、一昨年の５月にも「九州度自己採点」ということで実施し、よかネット70号（2004年・７月）に掲載しました。

今回は、“鹿児島”のことが、どの程度知られているのかを調べるため、20人の方に次頁表のような「鹿児島度調査」にご協力をお願いしました。

設問項目は、有名な観光地だけではなく、歴史上の人物、ご当地の美味しい食べ物、芸能人・文化人、ご当地の伝統行事といった幅広い設問としていますので、答える方は、幅広く、少々深く鹿児島のことを知っていなければなりません。

設問の中には、鹿児島在住の方でも知らないのではと思う「ご当地モノ」、たとえば“山田の凱旋門”、“妙円寺参り”などもあります。採点では、特に難しい設問、ほとんど知られてないであろうと思われる設問に重みをつけるなどはしていません。このご当地モノの設問で「知っている」「行ったことがある」と答えた方は、相当鹿児島度が高いものと思います。

アンケートの回答者は15名で、関東・中部在住者３名、関西在住者３名、九州９名（うち１名は鹿児島在住者）と九州以外の人にも６名の方に答えていただいています。

票数が少なく、細かい構成比でみても意味がありませんので、大まかな結果だけでみてみると次のようなことが言えるのではないかと思います。

①一般に鹿児島でも観光地である「指宿の砂風呂」「開聞岳」「桜島の溶岩道路」「知覧の武家屋敷」においては、概ね８割の方が「行ったことがある」と答えており、鹿児島の定番観光地へは「知っている」だけではなく、観光やビジネスで実際に行っている人が多いようです。このように有名観光スポットへ行った人が多いというのは、やはり鹿児島は“なかなかの観光地”であると感じます。また食べ物では「かるかん」「きびなごの刺身」も８割の方は食べているようです。

②「知っている」けど「行ったことがない、食べたことがない。実際に見たことがないなど」の項目では「内之浦のロケット基地」「屋久島の縄文杉」など少々遠くてなかなか行けないとこ

アンケート項目

1	あくまき	灰汁に浸した餅米を竹の皮で包んで灰汁で数時間煮たもち。黄粉に付けて食べるとなかなか美味
2	朝潮（初代）	徳之島出身の第46代横綱。昭和34年～37年の4年間横綱を勤める。優勝回数5回
3	出水のツル	10月中旬から2月末ごろまで、越冬のため出水平野にくるツルで、毎年約1万羽近くが観測される。
4	指宿の砂蒸風呂	指宿温泉の最大の売りモノ。海岸の砂浜で暖かい砂で埋められると汗も出てきて気持ちよい。
5	上野原遺跡	国分市川内地区で発掘された縄文時代早期（約9500年前）の縦穴住居跡
6	内之浦ロケット基地	大隅半島の中央部東側位置するにあるロケット基地　1970年以来、20個以上の衛星、探査機が打ち上げられている
7	開聞岳	薩摩富士といわれる円錐形の美しい山。知覧で飛び立った特攻隊は、この山を見て戦地に赴いたといわれる。
8	鹿児島の朝市	鹿児島中央駅の前のバスセンター裏に開かれる朝市。鹿児島独特の食材や漬け物等が並んでいる
9	カツオ腹皮	カツオの腹身の干し物で焼酎のつまみに良く合う
10	かるかん	自然薯と米粉を原料とした蒸し菓子
11	嘉例川駅	1903年鹿児島本線（現肥薩線）が開通した際、開業した駅。県内最古の現役の駅。現在、肥薩線の観光列車が停車する無人駅としても有名
12	川崎宗則	ソフトバンクホークスの鹿児島出身の選手。愛称は「ムネリン」
13	川路利良	日本の警察制度の創始者。小説　「翔ぶが如く」では冒頭のシーンに登場
14	きびなごの刺身	ウルメイワシ科の体長10㎝の小魚。手開きして酢味噌でで味わう
15	鶏飯	奄美大島の郷土料理。細かく裂いて味付けした鶏のささみ、椎茸、錦糸卵などをご飯の上に並べ、鶏のスープをかけて食べます。
16	ケシン団子	あんことモチとをこねたモノにハッカの葉で包んだお菓子。ハッカのことを鹿児島ではケシンという。
17	黒じょか	水で割った焼酎を温めて飲む専用の容器。これで電子レンヂでチンしても美味しいとのこと
18	こむらさきラーメン	天文館にあるラーメン店、鶏ガラをメインとしたスープに細麺が絡んで、鹿児島の特徴のあるラーメンの代表
19	西郷札	西南戦争時に薩軍の軍資金不足を補うため発行された軍票。松本清張のデビュー作としても有名
20	酒ずし	地酒をふり混ぜたすし飯に椎茸、干しダイコン、タケノコ、キクラゲ、新鮮な鯛などを入れた少し甘酸っぱい鹿児島独特のすし
21	薩摩切り子	薩摩28代藩主島津斉彬が推し進めた色ガラス。1985年に復活、カットが深く、カットの影が味わいがあるといわれてる
22	桜島溶岩道路	大爆発で流れ出てた溶岩地帯を走っているハイウエー道路
23	佐多岬	本土で最も南に位置する岬。北緯31度線に位置する
24	ザビエル公園のザビエル像	このザビエル像の作家は、ザビエルを宗教家というより開拓者とみなし、あえて十字架を胸の下に隠した像をつくる
25	私学校石垣の弾痕跡	西南戦争の最後の激戦地となったところで石垣には弾丸の跡が多く残っている。
26	示現流	薩摩藩に伝わる独特の剣術。攻めはあって守りなしといわれている
27	白熊	天文館のむじゃき発祥のジャンボかき氷。食べ終わると頭のてっぺんがいたくなることもあります
28	そらきゅう	注がれたら床に置くことなく飲み干さないといけない杯。先のとがったモノと穴が空いてモノがある。穴あきのものは指で押さえ早く飲み干さないといけない
29	つけあげ	すり身に豆腐、卵、調味料などを加えたあげもの 元々あじ、鰯などの青物が捕れすぎたときに保存用に加工したもの。
30	田中一村	1987年より奄美大島に移り住み、奄美の自然を細やかなタッチと大胆な構図で表現した日本画家
31	種子島銃	1543年ポルトガル人が漂着したことで伝わった火縄銃
32	沈寿官	李朝鮮の陶工の末裔であり、長男が沈寿官として継承し続け、現在15代目。司馬遼太郎のエッセイ「故郷亡じがたく候」は沈寿官をモデルとして書かれている
33	知覧の武家屋敷	「薩摩の小京都」といわれ、260年前から変わらない美しい街並みと生垣を配した武家屋敷群
34	てげてげ	鹿児島弁で適当、良いかげんの意味
35	長渕　剛	鹿児島出身の歌手。最近では毎年、桜島コンサートを開催
36	南州墓地	1877年の西南戦争で戦死した将兵約2千人が埋葬されている。中には長男20歳代、末っ子が10代半ばの4人兄弟の墓もある
37	なんこ	5㎝×1㎝四方の棒をもって、お互いに片手で出し合っての数当てゲーム。負けたら焼酎を飲むことにもなる
38	西田橋	肥後の石工、岩永三五郎が甲突川に架けた5大石橋の代表作。現在は石橋記念館に移設
39	肥薩線	海岸沿いの鉄道が敷かれるまでは、この肥薩線が鹿児島本線、八代から隼人駅までの路線、現在は、スイッチバックやループ線もあって観光鉄道となっている
40	平田靭負（ゆきえ）	1754年の木曽川治水工事の総奉行となった家老。工事完成後、犠牲者を出した責任をとって切腹。平田靭負をはじめ、犠牲者を祭った「治水神社」がが建立されている
41	福島の黒酢	伝統的な露天のカメ壺により6ヶ月以上の発酵熟成期間をかけて製造する
42	ぼっけもん	鹿児島弁で向こう見ずが輩、豪胆者の意味
43	ボンタンアメ	池田製菓製造。ボンタンを原料としたアメ
44	妙円寺参り	関ヶ原の戦いで敵将、徳川家康の目の前を突破し、国元へ生還した島津義弘をしのび、鹿児島市から伊集院の徳重神社まで夜間に歩いて参拝する行事
45	向田　邦子	1939年～1941年まで鹿児島で生活し、のちに鹿児島を故郷もどきとして、多くの作品に当時の鹿児島の様子を描いている　鶴丸城近くに「記念館」がある
46	山田の凱旋門	日露戦争に従事した山田村（姶良町山田）の人々の無事帰還を祈念して1906年に建造
47	ラーフル	鹿児島では普通の黒板拭きのことをいう
48	屋久島の縄文杉	屋久島に自生する樹齢数千年といわれている大杉
49	与論献奉（けんぽう）	島の黒糖焼酎（サトウキビの焼酎）を、人数分だけまわし飲みする儀式
50	六月燈	県内一円　7月に神社、寺院の参道や境内に灯籠を持ち寄って奉納する儀式で、今は鹿児島の夏の風物となっている

ろ、「西郷札」「種子島銃」などご当地の資料館に行かないと見られないもの、「長渕剛」「向田邦子」など芸能人・文化人があげられています。

③「知らない」では、今、県内では少し脚光をあびつつある「上野原遺跡」「嘉例川（かれいがわ）駅」など、まだ知られていないようで、浸透するには時間がかかりそうです。また「妙円寺参り」「与論献奉」などのご当地ならではの行事、風習はまだ知られていないようです。

余談ですが、私は学生時代に「妙円寺参り」に１度だけ参加し、徹夜で市内から島津義弘を祭っている徳重神社まで歩いたということもあって、非常に思い出深いものを感じます。また、機会があれば参加し、歌いながら夜の道を闊歩したいものだと思います。

このような調査は、機会があれば九州の他県も実施したいと思っているのですが、この“ええかげん”なアンケート表を作成するには、作成する人自身がその地域のことを良く知っていないと作成できません。他県のアンケートができるかどうかは人材にかかっていますので、いつ実施するかは全くの未定であります。

地域のことをどの程度知っているかを自己採点することは、県というエリアでなくても、身近な自分が住んでいる市町村でも実施してみたら、意外と知らないことがたくさんあることに気づかされるのではないかと思います。一度、市町村のイベントで実施してみても面白いかも知れません。

（やまだ　たつお）

表紙説明
地域計画のための一知半解事典

地域基幹型産業は全国で減少、これを先導型や地域づくりサポート型が支えている

山辺　眞一

●次代をリードする地域の知の集積を比較できないか

つくば、関西に次ぐ九州北部地域の学研都市づくりの手伝いを始めたのは1988年、昭和最後の63年であった。当時、テクノポリス法、頭脳立地法、リゾート法、多極分散法など、地域の自立に関する様々な法制度が、国から次々と出されていたことが思い出される。その頃から、頭脳や知といった言葉が、地域振興への取り組みの計画の中に少しずつ見え始めていた。

しかし、この頭脳とか知的部門といわれるものが指標としてどういうものがあるのか、まだこれという確信には至っていない。国勢調査の項目に出ている職業分類と産業分類のクロス集計をすれば、各産業分野での知的労働人口集積などがある程度は分かるかもしれない。表紙に示した新たな産業分類の考え方は、「21世紀への基本戦略－経済構造調整と日本経済の展望」(経済企画庁編1987年)に掲載された新しい分類の考え方(物財生産部門、ネットワーク部門等)を参考としながら、学研都市づくりによる九州北部地域の知の集積拡大のひとつの指標として提案していたものである。2000年のよかネット45号に、1981～1996年までの動向について解説を含めた記事があるが、今回は、民間の従業者の状況について、2004年の事業所統計結果をベースとして、18年前の1986年との比較を行った。（集計方法は※１をご覧ください）

●3つの部門の意味

45号の記事にも解説されているが、３つの産業分野の区分の考え方を簡単に整理する。

地域づくり先導型とは、地域が将来にわたって稼いでいくための主体を作り出していく産業とし、教育、学術研究機関、情報サービス、娯楽、専門サービス、金融、不動産などが該当している。

地域の基幹型産業は、今の豊かさ、所得を産み出しているもので、農林水産、製造、エネルギー、建設、卸売などとし、モノづくり、あるいはモノづくりを支える基盤サービスなどである。

生活サポート型産業は、人々の生活の便利さ、安心、安全などを支える医療・福祉、小売、飲食、廃棄物処理などが該当し、おおむね居住人口に比例して必要となる産業である。

●全体の就業者の減少、基幹型の減少が大きく影響している

部門別の前に、日本全体では、人口のピーク時期を間近に迎え、人口減少時代にいかに地域は生き残っていくかなど、人口減少が一般的に議論できる雰囲気となった。ほんの10年ぐらい前までは、自治体の総合計画策定などの仕事では、人口推計の結果を、自分たちの町だけは増加する（目標値という言い訳ではあったが・・）ということを当たり前のように記述するところがまだ数多くあった。しかし、どうしてもそう書けないところもあり、「交流人口」という言葉を提案し、これが少しずつ計画書の中に流行はじめていた。いまでは「定住人口」ではなく、「交流人口」を目標値とするところも多い。話しを元に戻すと、地方の人口減少、そして地域によっては就業者の減少が既に起こっているようである。全国人口は、1985年(昭和60年)から2005年(平成17年)の間に、約670万人増加し、首都圏と中部圏で大きく増加している。一方３大都市圏を除いた地方では、13万人の減少となっている。しかし、九州はこの間に約8万人増加となっていて、福岡県での人口増がカバーしている状況である。

事業所統計による従業者数と農業センサスによる基幹的労働人口を加えたものを従業者数（※２）としてみた。この20年間に全国では約160万人増加している。しかし、参考として集計した近畿圏では若干減少となっている。全国的には増加

ブロック別の人口推移　　単位：千人

	全国	九州	首都圏	近畿圏	中部圏
1985	121,049	13,276	37,618	20,081	15,943
2005	127,757	13,352	42,372	20,893	17,217
増減	6,708	76	4,753	812	1,275

資料：国勢調査、2005年は速報値

ブロック別の従業者数の推移　　単位：千人

	全国	九州	首都圏	近畿圏	中部圏
1986	52,689	5,210	16,916	8,637	7,343
2004	54,308	5,409	18,406	8,521	7,821
増減	1,619	199	1,489	▲ 116	478

資料：事業所統計
農林業センサス（1986⇒1985、2004⇒2006）

人口千人当たりの部門別就業人口　単位：人/千人

	地域づくり先導型			地域基幹型産業			地域づくりサポート		
	1986	2004	増減	1986	2004	増減	1986	2004	増減
全国	66.9	89.7	22.8	238.6	188.0	▲ 50.6	124.1	147.3	23.2
九州	55.2	73.8	18.7	211.3	173.1	▲ 38.3	125.9	158.2	32.3
首都圏	78.6	112.7	34.1	244.1	175.5	▲ 68.6	125.3	146.2	20.9
近畿圏	67.5	85.4	17.8	233.6	174.3	▲ 59.4	129.0	148.2	19.2
中部圏	69.5	80.6	11.0	271.7	231.1	▲ 40.7	119.4	142.6	23.2

資料：事業所統計、農林業センサス、国勢調査

民営産業・医療福祉就業者の集積（2004）　　単位：人、人／千人

	全国	九州	首都圏	近畿圏	中部圏
医療，福祉就業	4,156,236	576,347	1,235,326	709,060	475,455
人口千人当たり	32.5	43.2	29.2	33.9	27.6

資料：事業所統計、国勢調査

九州県別人口推移

	九州	福岡県	佐賀県	長崎県	熊本県	大分県	宮崎県	鹿児島県
1985	13,276	4,719	880	1,594	1,838	1,250	1,176	1,819
2005	13,352	5,049	866	1,479	1,842	1,210	1,153	1,753
増減	76	330	▲ 14	▲ 115	4	▲ 41	▲ 23	▲ 66

資料：国勢調査、2005年は速報値

九州各県別の部門別従業者の動向　単位：人／千人

		九州	福岡県	佐賀県	長崎県	熊本県	大分県	宮崎県	鹿児島県
地域づくり先導型	1986	55.2	62.1	48.9	49.7	51.2	56.7	51.8	50.2
	2004	73.8	85.0	65.9	67.3	67.0	71.6	66.9	64.6
ポイント増減		18.7	22.9	17.0	17.6	15.8	14.8	15.1	14.4
地域基幹型産業	1986	211.3	201.6	229.0	192.1	224.9	209.0	228.7	221.4
	2004	173.1	162.4	199.1	158.6	181.4	178.3	191.5	178.5
ポイント増減		▲ 38.3	▲ 39.2	▲ 29.9	▲ 33.4	▲ 43.5	▲ 30.7	▲ 37.2	▲ 42.9
地域づくりサポート	1986	125.9	136.1	120.6	122.1	118.5	125.6	124.1	114.7
	2004	158.2	163.6	152.5	154.4	155.0	157.6	158.0	152.9
ポイント増減		32.3	27.5	31.9	32.3	36.5	32.0	33.9	38.2

資料：事業所統計、農林業センサス、国勢調査

していても、地方・地域によっては減少しているところもあるようだ。これから団塊世代の大量の退職人口が控えている中、従業者の大きな減少が確実に起こるようである。

３つの分野でみると減少しているのは基幹型産業の分野である。全国的にも、製造業は約400万人で、農林業で100万人、卸売業で65万人の従業者が減っている。その結果、人口千人当たりの基幹型産業は50.6ポイント低下した。全国を上回って減少しているのは、首都圏で68.6、近畿圏59.4で中部圏は40.7で、九州はこれより低い減少幅となった。しかし、全国的にこの分野での減少は進行している。これらの基幹型の低下をカバーしているのは、先導型とサポート型の分野である。全国ではほぼ同程度の23ポイント上昇した。

先導型の場合は、首都圏が他の地域よりも大きく上昇している。先導型部門には、情報サービス等の分野や、金融・保険の分野などが含まれており、この部門を強くすることが地域の豊かさを作り出していくものであり、首都圏がその地位をますます高めている。首都圏に次いで九州の増加が見られるが、全国の増加よりも低く、首都圏との格差がまだ進んでいる。

一方、サポート型の九州の上昇は大きく、32.3ポイントであり、次いで中部圏が全国並の増加となっている。人口の増加によって量的拡大が進むと思われるサポート型産業において、九州の場合は、医療・福祉産業の集積が他の地域に比べて大きく、全国が32.5人／千人に対して、九州は43.2であり、1.5倍に近い集積を有している。

●九州各県も基幹型は減少、これをカバーするサポート型

次に、九州地域の県別の動向をみてみる。人口は、九州全体の増加は、福岡県の寄与するところ

が大きいが、他県の人口が福岡県に吸引されているということも考えられる。九州全体の人口は、約7万人の増加となっている。長崎県12万人、鹿児島県7万人の人口減少が大きい。

３部門別の人口千人当たり従業者数では、全国と同じく基幹型の減少が各県でみられる。熊本県43.5ポイントが最も大きく、次いで鹿児島県42.9、福岡県39.2と低下し、九州全体を上回る減少となっている。

先導型では、各県においてポイントの上昇がみられ、福岡県22.9ポイント上昇は、他県に比べて先導型の集積が高まっていることが分かる。全国に比較しても九州のサポート型の集積が高いことは先に述べたが、九州各県とも上昇しており、人口減少の大きい鹿児島県でも、38.2ポイント上昇している。いずれも医療・福祉業の集積が要因と考えられる。

全国的に人口減少へ転じ、今後は従業者の増加が期待できなくなる中、高齢者活用や外国人活用などの方策も考えられているが、いずれにしても教育、学術研究、情報サービス、専門サービスなどの先導型産業を強化することによって、付加価値の高い基幹型産業を産み出していくこと、また高齢人口が当分は増加していくなかで、サポート型の集積が今後とも拡大していくことが間違いないと思われる。　　（やまべ　しんいち）

参考　産業分類の方法について

注１：2000年45号に掲載したデータでは、1981から1996年の15年間の比較を行った。今回は、1986年から2004年の18年間、概ねバブル経済後の約20年間の動向をみたものである。ただし、2004年調査は民営事業所が対象であるため、1986年のデータ再集計を行った。九州以外のブロック別集計は、全国の産業中分類別の公務を含む全産業と民営の従業者比率を元にして、各産業別のブロック従業者数に乗じたものである。
昭和61年時の首都圏、近畿圏、中部圏の各都道府県別のデータ入手に時間と手間が必要なため、参考値として掲載していることをお断りしておく。

注２：就業者数は、事業所統計による中分類別従業者数に加えて、事業所統計にカウントされない基幹型部門の農林漁業に対して、農林業センサスによる農家労働人口を加えた。

注３：1986年以降、産業分類は２度改訂されており、「教育　⇒　教育・学習支援業」、あらたに「医療・福祉業」などいくつかの新部門が設定されている。これらの新部門によって３区分を再構成することも検討したが、1986年の区分が困難なため、以前の３区分に沿った構成を採用した。

注４：地域区分は、国土形成計画において協議されている次の区分によった。
首都圏：茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、山梨県
中部圏：長野県、岐阜県、静岡県、愛知県、三重県
近畿圏：滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県
九　州：福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県

高取焼400年祭と上野焼陶器祭に行ってきました

山田　龍雄

一般に福岡県の陶器生産地では「小石原焼」や「上野焼」が有名であって、春や秋の陶器市の期間には多くの人がレジャーと陶器購入を兼ねて出かけるところでもある。しかし、この「小石原焼」や福岡市西新にある「高取焼」のルーツが直方市東側に聳える福地山麓にあったことを知る人は少ない。私も「小石原焼」には陶器市の時も含めて４～５回は行っているが、高取焼きの窯元には、仕事の関係で昨年、はじめて訪れた程度である。

今年、「高取焼400年祭」があっていると聞き、もう少し「高取焼」のことを知ることができればと思い、出かけてみた。

●直方市内に「高取焼」の窯元は3件

最初に、直方谷尾美術館（1992年明治産業の故谷尾欽也会長が開設した美術館、昭和初期に建てられた医院の内部を改装し、美術館として使用）で開催されている「県下高取焼現代作家展」に行ってみた。この催しでは高取焼を継承している作家12名の作品と作家紹介のパネルが展示されていたが、12名の作家のうち６名が東峰村（旧小石原村）、３名が福岡市内、直方市内の窯元は３名だけであり、改めて「高取焼」の窯場が福岡藩内を転々と移動し、散らばっていることがわかった。

また、直方市での「高取焼」のルーツであるといったことが今ひとつ知れ渡っていないことには、

内ヶ磯窯跡は、この斜面池の水底にあるらしい

陶工館前の道路には駐車場に入りきれない車が溢れている

高取焼が移動した窯元及び新開業窯のルート

この窯元の数が少なく、小石原や上野のような陶器生産地としてのイメージが弱いこともあると考えられる。

次に、直方アートスペース（旧福岡銀行南支店の内装を改装し、レストランと谷尾美術館別館として営業している建物）に行くと、「出土品が語る筑前陶器のはじまり」というテーマで、市内の各窯場跡で出土した古高取焼（直方市内の２つの窯でつくられた高取焼のこと）と京都市内で出土した高取焼が展示されていた。最初、何で京都市内で高取焼が出土しているのだろうと疑問に思ったのだが、展示の説明を読むと当時の高取焼きの茶器としての価値の高さがうかがえられた。つまり、直方市内の窯場の出土が生産地出土であるのに対して、京都市内の出土は消費地出土ということらしい。1600年代初頭頃の京都では千利休、古田織部、小堀遠州といった３大茶人によって茶の文化が花開いた時期とされており、京都の商家が美濃焼、伊賀焼、高取焼など全国の窯元から茶陶器類を仕入れていたらしく、この中に「高取焼」も出土しているのである。

直方の内ヶ磯窯で焼かれたものが京都まで運ばれていたとは、当時の生産と流通の文化を知る上でも勉強になった。

●現在、内ヶ磯窯跡はダム底に眠っている

直方市内の「高取焼」の窯場を見て回る前に、黒田長政がはじめて「高取焼」を「宅間」の窯場で開始し、さらに２番目に本格的な窯場として開いた「内ヶ磯窯跡」があった場所に行ってみた。

この内ヶ磯窯跡は福知山ダムの工事中に発見されたといわれており、記録によると全長46.5メートル、14室からなる登り窯で、傾斜度19度という斜面地に築かれていたというから、相当な規模のモノがあったと想像される。しかし、現地にいってみるとダムの周回道路沿いに内ヶ磯窯跡の看板があるだけで窯場跡らしきものはない。立ち寄って看板の説明文を読むと、「この現在の場所から対面の斜面地にあった」と記されている。現在、窯跡は表面処理をしてそのまま保存している。当時としては、鷹取城の近くで登り窯が築きやすい地形を選んで窯場が選択されたと思われるが、現地で感じるのは、「よくこんな山奥に造ったものであること。京都まで運ぶため、この地から遠賀川河川敷まで運ぶのが大変であったろう」と考えさせられた。

このあと、市内の３窯場の一つに立ち寄ると、窯主の奥さんが出てこられ、いろいろ話をお聞きすることができた。話の中で「ここを訪れる人は北九州市内や福岡市内の方が多く、直方市内の人はほとんど見えないのですよ。直方の３つの窯場とも、昔からここにあるのではなく、一度外で修

高取焼の沿革

その始まりは、貝原益軒が書いた「筑前国続風土器」によれば黒田長政が朝鮮半島から連れ帰った陶工八山（日本名高取八蔵）が永満寺窯を築いた西暦1606年とされています。1614年には窯は頓野の内ヶ磯に移りました。当時、鷹取山には福岡藩の支城（出城）である鷹取城があったことから、窯はその管理下にあったそうです。

その後、高取焼の窯場は飯塚、山田、小石原など福岡藩を転々と移動し、福岡城下の西新に移って明治を迎えました。

最近まで、高取焼は、朝鮮陶工・八山が製作、指導したとされていましたが、1970年代以降の発掘調査によって作品に唐津焼や備前焼そして瀬戸・美濃焼などと同じ形・技術があることがわかってきました。このことは、400年前、福地山麓は朝鮮の陶工だけではなく、日本各地から陶工が集まる「国際陶芸村」であったことを示しています。

資料：高取焼400年祭シンポジウムパンフレットより

上野焼の沿革

豊臣秀吉による「文禄・慶長の役」により招致され、加藤清正公に従って帰化した李朝工・尊階と「茶禅一味」の奥義を極めた、豊前藩主・細川忠興候（三斉）の二人の出会いが、上野焼400年の最初の一歩でした。

細川忠興候は1602年に尊階を招き、水質、釉薬の採取に最も適した上野の地に窯を気づきました。尊階は地名にちなんで上野喜蔵高国と名を改め、細川忠興候の指導により、三斉好みの格調高い茶陶を30年間、献上しつづけました。

徳川時代になると、徳川茶道指南役の大茶人・小堀遠州が茶器全国七ヶ所の窯元を選定しました。これが遠州七窯（遠江（静岡県）の志戸呂焼、近江（滋賀県）の膳所焼、山城（京都府）の朝日焼、大和（奈良県）の赤膚焼、摂津（大阪府）の古曾焼窯、豊前（福岡県）の上野焼、筑前（福岡県）の高取焼）です。

資料：上野焼のＨＰより

行した人が直方に帰ってきて窯場を開いた。もっと窯場が増えないといけないですね」とおしゃっていたことが印象的であった。また、ここの窯主は「古高取焼」にこだわり、大きな建設工事があると現場にいって地層をみて、使えそうな土であれば分けてもらうらしい。２年前にオープンしたショッピングセンター「イオンのおがた」の建設現場からも土を分けてもらってきたとのことであった。

●上野焼陶芸館では車が道路にはみ出している

福岡へ帰る途中、隣町の福智町（旧赤池町）にある「上野焼陶芸館」に立ち寄ってみた。

この施設は４年前にオープンしたとのことで、陶芸展示館の他に農産物直売所、上野焼協同組合事務所も併設されていた。当日は、この施設内の中央広場で地域の商工会や農業組合などから出店したテントが10件程度並んでおり、賑わいを見せていた。駐車場には大型バス２台も駐車し、一般駐車場は満杯状態であり、車は施設前の道路に溢れていた。「高取焼400年祭」での各展示施設や窯場の賑わいとは雲泥の差であった。これは上野焼は、この陶芸館周辺に13件の窯元と集積し、焼き物の里といった雰囲気があり、「窯巡り」といったことで時間消費ができる場所であることが「高取焼」との決定的な違いであるようだ。

個人的には「古高取焼」の素朴な味わいも何とも良いとものだと感じるのであるが、「高取焼」をもうひとつメジャーにするためには、時間をかけて陶芸家を誘致するなど、本当の意味での「陶芸の里」としての雰囲気づくりをしていくことができればと思った次第である。

（やまだ　たつお）

所　員　近　況

■前原市の中心市街地の人たちと九大生の交流の場づくり

10月３日に第４回の糸島交流サロンを開催した。今回のサロンも前回同様に30人以上の人が参加してくれた。今回は、九大で景観の研究をしている高尾忠志さんに、糸島地域の景観づくりで研究室が係わっている話と、地元の人たちと一緒に景観づくりを具体化している由布院の取り組みについて話してもらった。

糸島地域では、新しい田園居住のライフスタイルを提案したものと、道路事業の景観づくりの２つの話をしてもらった。特に興味深く思ったのは、民間事業の景観づくりと公共事業の景観づく

りの違いである。公共事業（道路事業）の場合、基本的に発注者（公的機関）を納得させられれば、事業が進む。住民は発言はするものの、責任主体ではないから、なんとか折り合いをつけることができる。しかし、民間事業（田園居住事業）の場合は、事業者だけでなく、住民も納得しないと事業ができない。景観を良くするにはコストもかかるし、事業者が開発をしてくれたとしても人が集まる保証はない。住みたい人が集まる事業があったとしても景観的に良いかどうかは別問題である。それこそ「良い景観＝住宅が売れる」のであれば、デベロッパーも喜んで投資してくれるのだろうが、そんなモデルは今のところ見あたらない。自信を持って売れる景観を提案できる人は、今のところ黒川温泉の後藤さんぐらいではなかろうか。民間事業での景観づくりはなかなかハードルが高いと感じた。

その後の交流会では、高尾さんに連れてきてもらった研究室の学生と地元の人の交流をしてもらった。地元の人たちと話す際に、「九大といっしょに何かできないか」「九大生の活力を地域に呼び込みたい」などという声をよく聞くのだが、具体的にどんなことをしたいのかは、あまりイメージがないようだった。どうもこれまで地元の人が九大の先生や学生と直接話す機会はあまりなかったようで、期待だけが高まっている感じだった。それならば、「生」の九大生に触れてもらう場をつくったらどうだろう、と交流会を企画したわけである。

すぐに卒業してしまう学生を連れてきても仕方がないので、大学院生を連れてきてもらった。そのおかげか、学生さんに話を聞いてもらおうと飛び込みのプレゼンが２件あったり、学生宿舎の募集宣伝があったりと、思わぬ効果があった。今後、九大と前原地域がどのようにつながっていくかは、まだよく見えないが、チャンスがあれば、何度も学生に前原に来てもらおうと思っている。

実は、学生に前原のいいお店を紹介して足癖をつけてもらうのが、今回のサロンの隠れたネライでもあった。サロン後に連れて行ったお店の評判も良かったので、近いうちにこの地域で宴会している九大生を見られればと、ひそかに期待している。　　（本田　正明）

本・BOOKS

協働社会をつくる条例
市民がつくったまちの憲法
使える！岸和田市自治基本条例

地方分権の推進による自治体の役割の変化、市民活動の活発化、個人、地域ニーズの多様化などにより、地域のことは自分たちで考え、進めていこうという時代となり、行政の計画の中で「参加」「参画」「協働」「共働」という言葉を見ないことはない程になってきています。

自治体の計画づくりのお手伝いをさせていただく中でも、市民の意見を反映できるような市民参加を実現するため、これまでのアンケート調査はもちろん、会議やワークショップなどの方法で直接意見を聞くだけでなく、案ができた段階でパブリックコメントを実施し、案が決定される前に見直す機会をつくることも当たり前になってきています。

このような中、自治体によっては、“自治”について自治体と市民の役割や約束事を明文化する条例の制定に着手するところも増えてきています。「協働社会をつくる条例」松下啓一著ぎょうせい（2004年９月発行）ではその内容についてわかりやすく整理解説されています。また、自治体が条例制定までに奮闘した模様が本になっているものもあります。

●自治に関する条例とは

自治に関する条例は重点の置き方によって大きく下記の３つに分けられています。

・自治基本条例（自治に関する基本的な事項を定めた条例）
・市民参加条例（行政の政策決定、実施、評価に市民が参加する仕組みなどを決めた条例）
・市民協働支援条例（市民やＮＰＯなどが対等な立場で共通の目的のために協力することやその活動の支援を総合的に規定したもの、ＮＰＯ団体への具体的な支援を規定したものと２種類がある）。

これらの新しい条例が生まれてきた理由として、既存法では、市民参加や市民協働、情報公開など

自治運営の基本となる事項に関する規定が無いことや、システム化することによって首長は替わっても市民の知恵や力が自治体の政策活動に結びつけることができることが挙げられています。

しかし、各自治体の条例のとらえ方によって、一つの条例で全てを網羅したり、自治基本条例と、参加だけに特化した条例を一緒に施行したり、ひとつひとつ作っていったりとその方法は各自治体で異なります。

●自治基本条例の定義は無い

日本で最初の自治基本条例は、理念的なものとしては、1997年３月大阪府箕面市「箕面市まちづくり理念条例」、具体的な規定をした条例としてモデルとなっているのは、2000年12月北海道ニセコ町「ニセコ町まちづくり基本条例」があります。

自治基本条例については、共通の定義はありません。確かに、自治体にある他の条例との位置づけも様々ですし、名称も自治基本条例だったり、まちづくり基本条例、それ以外だったりします。

姿は違っても、大まかには次の５つの内容の全てや一部が含まれるものが多いようです。

①まちづくりの基本理念・ビジョン
②市民の権利や責務
③まちをつくるための制度や仕組み（例：住民投票など）
④自治体の組織・運営・活動（例：職員意識、情報公開など）
⑤最高規範として他の条例や計画などの指針となる（条例の位置づけ）。

●条例は、制定過程や実効性があることが大事

本の中で印象的だった言葉は「条例は存在するから価値があるのではなく、社会が動いてはじめて価値がある」というものでした。自治に関する条例は、制定過程に市民の関わり方が重要で、条例制定後は、住民が必要な時には行動に移していけるような仕組みがあることが大事ということです。

●まちや地域について関心を起こす手段のひとつに

ある自治体の条例について制定までの話を伺う機会がありました。その条例では、その自治体が積み上げて来られた市民と地域と行政の関わり方を立場ごとに整理されていました。仕事などで「市民参加」「協働」の場を見聞きするものの、個人的にそれを実感するのはなかなか難しいと感じていましたが、こんな手段と整理の仕方があるのかと目から鱗がおちたようでした。

協働社会をつくる条例

自治基本条例・市民参加条例・市民協働支援条例の考え方

著者：松下　啓一

発行：ぎょうせい

市民がつくったまちの憲法

～大和市自治基本条例ができるまで～

監修：牛山　久仁彦
編著：大和市企画部
編集協力：大和市自治基本条例をつくる会

発行：ぎょうせい

使える！岸和田市自治基本条例

－活用のための制度設計－

編著：山口　道昭
西川　照彦

発行：第一法規

現在ある自治体で条例づくりのお手伝いさせていただいています。「参加」や「協働」という言葉は、様々な解釈があり、目にはっきりとイメージできることでも無いのでいろんな意見が飛び交います。

一般的に、条例は、簡単なことも固い表現になりがちで、わかりにくいというイメージが多くあるかもしれません。タイトルで紹介している大和市や、福岡県内の自治体では、条例の内容をわかってもらうため、寸劇を交えたシンポジウムをするところもあるようです。しかし、自治に関する条例は、定義があるわけではなく、各自治体と市民が必要なことを規定していくもので、内容も作り方もその場で議論しながらつくられていくのだと思うと、やはり、身近な問題等に関する意見を積み重ねることが、まちや地域に関心を起こす力のひとつになるのではと感じています。

（愛甲　美帆）

第2回サイエンスキャラバンの案内

第２回のサイエンスキャラバンは、“農を活かす科学とは？”をテーマに農学研究院の２人の先生に議論してもらう予定です。糸島地域は福岡都市圏への農作物供給地であり、近年では農産物直売所も多く立地しており、農業に関する関心の高いところである。しかしその一方で、前号のよかネットで紹介したように、志摩町の農地の２割以上が耕作放棄地になるなど問題も生じています。そこで、今回はその耕作放棄地に焦点を当て、これまで農地（特に田んぼ）が果たしてきた役割やその利活用方策を考えている人に来てもらい、議論しようということになりました。

１人目の後藤先生は、輸入穀物飼料に過度に依存した現在の霜降り牛肉生産ではなく、国内の草資源である耕作放棄地を活用した安心、安全な牛肉生産を目指している取り組みについて話していただきます。２人目の佐藤先生には、農の営みによって生産される「食べ物」だけでなく、生物の多様性や景観形成といった「自然環境の創出」という農の新たな価値について話していただきます。

モデレーターは前回同様、九州大学知財本部の中武さんが行う予定です。興味関心のある方はぜひご参加をお待ちしています。

日時：１１月３０日（木）午後７時から
場所：志摩町役場　第二庁舎２階会議室
お問い合わせ先：糸島サイエンスキャラバン実行委員会
事務局
TEL：０９２－６４３－３１５９

編集後記

■いきなり残暑から秋深しの気温の変動で、すっかり体調を崩してしまい、寄る年波にも勝てず、腰痛にまでなって、日頃の体力づくりの大事さをひしひしと感じた。これに追い打ちをかけるがごとく、久しぶりに統計書と睨めっこを始めたものの、文字が霞んで見え、眼鏡が必要になったことも痛感、そういう年代になったのか、と変に納得してしまった。（べ）

■住んでいるマンションが経費節減のため９月に管理会社を代え、その影響で10月に住民による草刈りが行われました。20人以上の参加者がいましたが、なんと私は２番目に若い（多分）ようでした。うちのマンションも高齢化しているようです。そして次の日「昨日はお疲れ様でした。（中略）来年から毎年恒例の行事にしていきたいと思います。」との張り紙がありました。息子さん娘さん世代の人が参加してくれるようにならないと継続はむずかしいのではないかと思いました。（さ）

よかネット　No. 84　2006. 11
（編集・発行）
㈱よかネット
〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町３番８号
福岡パールビル８階
TEL 092-283-2121　FAX 092-283-2128
http://www.yokanet.com
mail:info@yokanet.com
（ネットワーク会社）
㈱地域計画建築研究所
本社　京都事務所　TEL 075-221-5132
大阪事務所　TEL 06-6942-5732
東京事務所　TEL 042-501-2531
名古屋事務所　TEL 052-202-1411
㈱地域計画・名古屋